



西田 昌市

「下から目線のトルネード」

先人たちの薫陶によって、優れたアーティストたちが続々と頭角を現わしはじめた日本のフラメンコ界。それに比べると、プロデューサーやディレクターやマネージャーなど、まとめ役の裏方人材層が相も変わらず薄すぎるのは業界のフシギであり、また先々への不安材料、イコール伸びしろでもある。

そんな状況の中、突如彗星のように現われ、僅かな間にフラメンコスタジオ、スペイン料理店、タブラオ経営などを軌道に乗せた謎の人物。私よりひとまわり半も若い彼の名を西田昌市（しょういち）という。昨春ころからパセオライブに頻繁に顔を出してくれたことがきっかけで呑み仲間となり、最近は新宿ガルロチの村松尚之さんとツルんで呑む機会も多い。呑み会の性格は、建前厳禁・本音オンリーのフラメンコ何でも討論会。

それでもまだまだ西田氏は私にとってミステリアスな存在であり、彼自身とそのダイナミックな構想と行動について、思う存分突っ込んでみようじゃないかと、酔った勢いで今回の対談が実現。

— PROFILE —

Shoichi Nishida

岐阜県出身・IT業界に従事。1972年12月13日生まれ。O型。お酒が大好き。休みの日は朝から呑んでいます。でもたまには禁酒をします。

文／小山雄二(本誌発行人・編集長)

撮影／井口由美子(本誌編集部)

texto por Yuji Koyama

foto por Yumiko Iguchi

ハレオ掛けたい！

小山 シラフで語るのとは今回初めてですが(笑)とても新鮮です。今日もまじめに盛り上がってまいります。さて、タブラオ・カサ・アルティスタやスタジオ・アリアーテやスペイン料理・バリーカ。どれも実質オーナーさんなのに「管理人」と名乗るのは何故でしょう？

西田 自分自身オーナーって云うのが、上から目線な感じがして嫌な違和感がありますし、周りにつまらない壁を作るだけです。僕はまだフラメンコを観初めて3年の新入りですし、いろんな方々に礎を創っていただいている世界ですから、オーナーという実感もまるで無いんです。

小山 3年前に観た初フラメンコって？

西田 赤坂のノヴェンバー・イレブンスです。たまたま行って、その時たまたまフラメンコをやってたんですね。満員御礼で立ち見だったんですよ。で、一部が終わって友達と呑んでたら、まったくご存知ない方が、もしよかったら私の席をお譲りしますって、一番いい席にチェンジして下さったんです。初めて観るタブラオフラメンコの衝撃に面喰ってましたが、そのご好意が凄くうれしかった。そこからこの店も好きになって、店長さんとも仲良くなって、フラメンコライブやる日に通うようになりました。

小山 フラメンコをキーワードに、次々と気持ちのいい縁に恵まれたわけだ。

西田 はい、それから出演者の方々にもフラメンコのことをいろいろ教えてもらえるようになって、急速にハマって行きました。高円寺のエスペランサとか、西日暮里のアルハムブラとか、当時の新宿エル・フラメンコ(現ガルロチ)とか、カサ・アルティスタとか、都内のタブラオ巡りをやり始めたんです。**小山** 初タブラオでいい席譲ってくれた方の善意が、フラメンコ界にラッキーをもたらす呼び水になったんだね。

西田 はい。いろいろな芸能・芸術ジャンルがありますが、譲ってあげようというその精神って、フラメンコ特有の何かじゃないかって、興味津々でした。

小山 で、フラメンコそのものの初印象はどうだったの？

西田 メインで踊られている方が、空間全体を支配していて目映いくらいに輝いてましたね。他のジャンルでは感じられなかったことです。その雰囲気を一発で好きになりました。ギタリストや歌い手と一体になって、凄いい靴音出して、身体全体を惜しみなく使って、全身全霊でダイナミックに踊る。感動もしましたし、大きな衝撃も受けました。いいもの観たな、いいものに出会ったなって。そういうジャンルは初めてでしたから。

小山 まだ見ぬナニモノかに、とうとう出逢ってしまった感じ？

西田 はい、お酒と料理、雰囲気のいいスペースで、素敵ステージを観る。そういうのは以前から好きでした。フラメンコには静寂と爆発っていう極端なコントラストがあって、具体的にはそこに惹かれたのかもしれない。

小山 コントラストって、フラメンコの重要なファクターだよ。スペイン国立バレエのナハール監督も、そこを舞台創りのポイントの最高位に挙げてる。

西田 それ、前にパセオで読みました。例えばフラダンスって、ゆるやかな動きがずっと続きますよね。フラメンコの静と動のギャップにはほんとうに驚きました。フラメンコって説明が無くて、いきなりパーン！ですから(笑)

小山 ギャップの落差というか、強烈なコントラストの美しさというか、昔からそういうのが好きだったの？

西田 はい、そういう意味だともうひとつ、小さな頃から好きだった“花火”が僕にとってのそれかも知れません。

小山 おっ、花火か、なるほど。

西田 打ち上がる前の静寂と、腹に響くような迫力の音響と美しい光景。あれも静と動……今も好きですね。

小山 そしてクライマックスで粋なおっさんが叫ぶ「たつま屋ー！」

西田 (笑)それですそれです、ハレオですね、僕もやってみたくて！上品に構えるのじゃなくて、ステージと客席が反応し合う一体感が好きなんです。

小山 こないだのカサのライブでも、じゃんじゃんハレオ飛ばしてたじゃない。

西田 恥ずかしいけど、そうやってるうちに上手くなれるかもしれないって願望(笑)。拍手とかハレオのタイミング、その間合いが絶妙な人がたくさんいるのにびっくりです。歌舞伎だと「よっ、何とか屋！」みたいな。素晴らしい！っていう自分の中の強い衝動をハレオで伝えられたらどんなにうれしいだろうって。

小山 いい性格してんなあ(笑)

西田 もちろんフラメンコ自体が凄いですけど、同じ場にいる踊り手と歌い手とギタリストが三位一体になって、さらにお客さまが加わって四位一体、五位一体になっていく相乗効果的な状況に、タブラオならではの居心地の良さを感じるんですね。

小山 芸としては静と動のコントラストの美、全体としては居る人全員がダイレクトに喜怒哀楽を共有するというか、そのへんがポイントなんだね。

西田 “共有”ですね、その通りです、三位一体どころじゃないです。僕の中ではお酒や料理も大切ですから。

小山 なるほど、タブラオフラメンコなら五位一体くらいまでは楽勝だよと。

西田 はい、格別です、タブラオ好きですね。オフレコですけど、劇場公演は未だに僕の中ではちょっと居心地悪い。最初が劇場公演だったら、こままでフラメンコを好きになっていたかどうかかわからないです。

小山 そこ興味深いね。ハレオ掛けて気持ちよくみんな一緒に盛り上がりたい。

西田 はい。逆に僕が呑まない人だったら、劇場公演を好きになっていたのかもしれない。

下から目線

小山 初めてパセオライブで会った時から、はっきり物は云いつつも、西田さんは徹底的な“下から目線”だよ。

西田 フラメンコと関わる中で、下から支えるっていうのは大げさですけど、なるべく目立たないように役立ちたいっていう望みはあります。

小山 この対談出てもらうのにも、写真ダメですとか、手こずったもんなあ(笑)

西田 去年の秋にお声掛けいただいた



カサルティスタ木曜ライブより／左から三枝麻衣、梶山彩沙、荻野リサ、三枝雄輔、ミゲル・デ・バダホス、フェルミン・ケロル

頃から胃が痛かったですね。でも、この収録が終わったら、この先はバラ色です。

小山 あはは！でも、そういう地金の謙虚さがいわゆる綺麗ごとじゃなくて、君の精神生理の欲求だってことは最初からわかってたんだよ。

さて、最初の“管理人”っていう言葉に戻るね。呑みながらいろんな話をしたけど、君はオーナーさんという呼び名を嫌い、管理人という呼び名を好むよね。その理由に踏み込みたいんだ。

西田 オーナーさんっていう言葉自体、やけに上から目線だなんて感じます。フラメンコの世界って、これまでたくさんの方々の関係者の方々が、ご苦労の連続の中で永い時をかけて創り上げて来られた世界です。新参者である僕にもそれがよくわかります。だから後続しようとする人間には、そこを間違えてはいけないうって戒めが必要です。あくまで“単なる管理人”という立場をわきまえることが、逆にこの世界で何かお役に立つためのベーシックな認識だと思っんです。

小山 うん、上から目線で牛耳ることもなく、仲間には自由に動いてもらうけど、全体の危機管理だけはきっちり押さえる手法。フラメンコ協会の田代淳さんなんかもそこらへんの急所を心得てるから協会も分裂せずにここまで発展してきたわけだけど、若い世代でそういうしなやかなリーダーシップを発揮できる人材は、ソニアジョーンズとガルロチの村松夫妻以来だったから、西田昌市の登場に皆してびっくりしてるわけだよ。

西田 いえ、実績の歴史がケタ違いですし、僕はただの新入りですから。信頼できる人たちにお任せしてるタブラオやスタジオにしても何にしても、スタッフのみんなが自発的に考え、それを実践してくれるからこそ出来ているだけのことなんです。何か間違った方向に行ったり困ったことがあれば喜んでアドバイスしますが、基本的にはそこにいる人たちが経営してくれているんですね。出資はしましたが、それで終わりってことじゃなくて、続いてゆくための全体管理には責任を持つ。

なので僕はオーナーでも何でもなくて、何かあった時にはこういうふうに行って行こうよって盛り立てていくアドバイザーでいたいので、管理人さんが一番しっくりくるんです。

小山 レアだわあ(笑)

西田 あともう一点あって、そもそも創業57年のカサルティスタっていうタブラオはギタリストのホアン一色さんがずっと培ってきたお店です。そこを絶やさずに続けたいという想いで始めた僕はオーナーではなく、オーナーというならそれはホアンさんというのが正しい。ホアンさんのフラメンコに対する情熱を継続させるために裏方をやらせていただいているのが僕っていう位置づけです。

小山 過去から未来につなげる現在のつなぎ役だね。

西田 はい、僕は今46歳ですが、あと20～30年たったら僕がカサを引き継ごうと思える時期が来るかもしれません。でもまずは、その中継点の役割を果たすことが僕の本望です。

小山 そういう地味な大望のために、

謙虚にストイックに下から目線を徹底したいってのが、君の本音なんだ。

西田 自分だけで成立するものなら“上から目線”もありで、例えば誰にも頼らずカラオケ大会で優勝するのならそれを自画自賛するのはアリですね。ただトブラオっていうのは、アーティストがいて、お客様がいて、お店のスタッフがいて、協会やパセオがあってこそ成り立つものですから、上から目線や自画自賛をやってる暇はなくて、少しでもその世界全体のすそ野を広げる活動にエネルギーを集中したいんです。

小山 そうすること自体に、西田さんは大いなる充実を感じるわけだ。

西田 そうですね、すごい好きです。でも僕の場合、実際の運営はスタッフに完全に任せ切りなんですよ。

小山 てことは、任せられる人材を捜し出す力が実に重要になってくる。

西田 合う合わないのフィーリングは重要ですね。フラメンコの世界で少なくともこれまで僕は強運でした。

小山 フィーリングも大きいだろうけど、ひとつにはITの世界でさまざまな人間と出会い、人間を観る目を磨き続けてきたこと。そしてもうひとつが下から目線。後者のスタンスを確立した時期はいつごろなんだろう？

西田 うーん、これはひょっとしたら、本格的にはトブラオを運営しようと決めた後からかもしれません。普通のビジネスのやり方ではダメだって、自分

の甘さを思い知らされましたから、そのあとの方向転換です。

小山 何が君を下から目線に変えたのか？ その必然をぶっちゃけてよ。

西田 ぶっちゃけるんですか？

小山 ぶっちゃけ対談だもん。

西田 ぶっちゃけ対談ですもんね。

ぶっちゃけ

小山 この世界、感動することも多いけど、ドン引きすることもあるだろうって、初めてサシで呑んだとき聴いたよね。あの時君の話してくれた『NGクソ婆あ事件』、あれにゃあ腹抱えて笑った。

西田 いやあ(笑)あの一件は痛烈に印象的です。あの頃は、僕のほうこそ上から目線だったんですね。逆に自分のスタンスを改善する上でとても有益な体験でした。

小山 ほんとにメインにもって来たいくらいの話なんだけど、さすがにそりゃ無いわあ(笑)お蔵入りにいたしましょう。

西田 (笑)お蔵入りにいたしましょう。

小山 じゃあ、一部ヒンシュク喰らうかもしれないけど、フラメンコ界の未来にとって有益になるような話をしようよ。

西田 はい、賛成です。フラメンコのアーティストって、純粋で真っ直ぐな方々が多いです。それは僕がこの世界に強烈に惹かれた理由でもありますし。

一人ひとりがフラメンコに対する考え方や流儀に強いこだわりを持っています。

小山 そうだね、その種類たるや日本だけでもアーティストの数だけ、いやアフィショナードの数だけあるよね。

西田 はい。そのこだわりをひとつひとつ個別に理解し共感できないと、その先の発展的な話にはつながっていかない。西田はわかっちゃいない、話が合わない、みたいに終わっちゃいますね。

小山 うん、すぐ終わるね。

西田 フラメンコ人口を増やし質を高めていくには、共存共栄のためにみんなで協働していくには、それぞれのベクトルに対し自分の方から寄り添うことも必要です。そこに気づいてからは、自分の考えを押し付けることはほとんど出来なくなりました。もちろん自分の想いや感じ方を素直に語ることは出来ます。けど相手の話す内容を、それぞれ個別に噛み砕いていけないと話が先に進まないです。

小山 純粋がゆえにすべてにアクが強く、それぞれストライクゾーンが狭い。

西田 その狭いストライクゾーンにカーブ、シュートとか直球とか、ゆっくりな球だけとか、いろいろありますね。その人のベクトルとか感性とか好みに寄り添って行かないと、現実を改善させる話までは進めることはできない。

小山 あっ、そこで下から目線か？

西田 はい、だから下から目線は必須で、それまでの自分の中にはない新たなストライクゾーンを、毎回丁寧に探りながら話して行かないと。

小山 (笑)そこまでやってるんだね。そこはオレには出来なかった王道だよ。これからも、そのスタンスよろしくねって、お願いしておこう。

西田 でも、小山さんがフラメンコ専門の月刊誌を35年も続けて来られた理由もそこにあるんじゃないですか？

小山 それが出来てりゃ、もうちょいまともになってたさ(大笑)。さてと、ついでにライブについてのアルアルをひとつ。「今日の私の踊り、どうでした？」って定番の問いにはどう応えているの？

西田 まだ何も知らない頃は正直に答



カサアルティスタの景山朋美店長と

えて、結果嫌われたことも多かったです。率直に感想を云うと、いきなり泣かれ始めて、あれ僕そんな泣かれるようなこと云ったっけって哑然、とか(苦笑)。でも、アーティストは皆、そのライブに対して頑張ってる自分をピークを持って来て、それを全身全霊でぶつけて行くわけですから、精一杯闘った直後にここがダメだったって云われたら、そりゃ誰だって当たり前に傷つきますよね。寄り添う目線は時にはどうしたって必要で、そこに気づくためのいい経験でした。

小山 「今日はどうだった、ホントのこと云って」ってのは、翻訳すると「もっと私を褒めて」ってことだからね。それが分かるのに、上から目線のおれは二十年かかったから、あんたは早いよ(笑) ただ例外はあるもので、デカイ公演が終わると翌日電話かけて来て、公演の改善点を貪欲に聴こうとする踊り手もいるんだ。良かったよっておおざなり云うと怒るから、良かった所と改善点を並列でビシバシ云うと凄く喜んでくれる。鍵田真由美なんだけだね。

西田 鍵田さんくらいになると、いいこと云われる必要がないんですね。ダメな所とそれを改善するポイントって何だろうってことをきちんと知りたい。

小山 うん、その通り。次回以降にそれらが反映改善されるケースも多いから。

西田 改善するポイントを自発的に見つけて行く方って、やっぱり自然と上に上がって行く。いや、上っていう言葉はおかしいか……極めていく、なのかな。

小山 そっちだね。さて、ここまでのぶっちゃけで今までミステリー満載だった西田昌市の内部構造をほんの少しだけわかった気がします。狭いストライクゾーンのそれぞれに柔軟に対応しながら、全体の推進力は決して落とさない。たいへんな本業を別に抱えながら、どうやってその膨大なストレスを解消するの？

西田 そこは好きでハマってることなんで仕方ないです……ほんと云うと、仕事ない日は何にも考えず、家で朝から酒呑んで寛いでます(笑)

小山 いや、それ聴いてホッとしたよ。

では次に、西田昌市ご本人について、もう少しだけ突っ込みます。

恥ずかしいけど何かやりたい

小山 座右の銘は？

西田 人に喜んでもらうことをしたい。

小山 うん、ズバリ想定内。

西田 小学生の時に工作で椅子を作ったんですよ。ペンキ塗って、けっこうきれいに仕上がって、僕なりにいいものが出来たなって。そしたら一緒のクラスの女の子が「しょうちゃん、これちょうだい」って。いやだったんですけど、僕の爺さんに「人に喜ばれることは、やった方がいいぞ」って云われて彼女にその椅子をあげたんです。その瞬間、僕はいやだったんですけど、そうしたら彼女が凄く喜んでくれて、僕まで凄くうれしくなった。爺さんのこと大好きだったので、「人に喜んでもらうことやる」っていうのはとても大切なんだな、いいことなんだって、その時刷り込まれたのかしれないって、いま話しながら気づきました。

小山 現在に直結するいい話だね。おれもあんたの爺さんみたいなタイプ好きだな。ついでにもうひとつだけ自己分析を。

西田 意識して大切にしているのは“鈍感力”です。鈍感な力がないと、恥ずかしくて生きてられないし、特にこの時代、何か始める時に考え過ぎちゃうと何も出来ないと思うんです。

小山 厳密に考え過ぎると、肝心な一歩目が踏み出せないんだよな。

西田 はい、眠れなくなるし、拳句に体壊しますから。鈍感でないといけなと思ったのは、タブラオをやるうって決めた頃かもしれません。そもそも自慢できるものは何にもないし、一方で何かしようと思って一歩踏み出して、傷ついてるばかりの毎日じゃ、踏み出した意味もないですし。自分をアピールすることなく何かをしたい恥ずかしがり屋なんですね。

小山 でもそうした戦略の先には、ちゃんと明るい未来が視えてるね。けど、シャイだったり鈍感だったら成功するのかって云ったらそんなこともないわけで、そこに精神的な何かがあるはずなんだ。それって何だろう？

西田 うーん……巻き込み力、ひょっとしたら自分にはそれがあるかもしれないって思うことは時々あります。

小山 なるほど、君のトルネードにはおれまで巻き込まれちゃってるし(笑)

西田 小さい頃から「仕切り」は出来たんですが、「まとめ」は出来なかった。仕切りは、ある程度まとめが出来る手前なんですけど、「こうやっていこうよ！」っていうのは好きでした。ただし持久力はメチャクチャ無いです。

小山 シャイなのに巻き込む力のある奴で、ただし持久力はない。

西田 (笑)だから、農耕か狩猟だったら狩猟民族です。僕、絶対に耕せないです。辛抱弱い。だから辛抱強いところは他の方に引き受けていただいています。

小山 瞬発力は？

西田 ええと、瞬発力しかないです。実際一緒にやってくれてる人は、農耕民族的な持久力がある方たちなんです。僕はただ思ったことをやってみたくなって、慎重には考えず、とりあえず前に進む。

小山 好奇心も強いよね？

西田 好奇心は、そうですね、モノによりますけど強い方です。でも、僕スペイン行ったことないし、持久力ないから飛行機で長く座ってるのが苦手。ハワイでも8時間、無理ですね。どれだけ遠くても沖繩が限界です。

フラメンコの未来ヴィジョン

小山 では、フラメンコ界の未来にとって有益となるような話をもう少し。日本のフラメンコ界の現状分析と、その改善案について聴かせてください。

西田 はい。パセオ4月号の座談会記事『わたしの提案』はとても面白かったですね。フラメンコ全体のパイを大きくしていくために具体的にはどうしたらいいかってテーマについて、参加ライターの皆さんが真剣に踏み込んでます。

小山 そう、あれは白井盛雄さんが優れた切り口を発見して、そこにみんなが反応して、いい議論が生まれたんだ。地方のフラメンコチームがたくさん増えたら、その地域の子供たちも自然と



新生カサルティスター周年記念ライブ(2019年4月)より

フラメンコに親しむ。そういう循環を作るインフラに少しずつ着手しようって。

西田 サッカーのJリーグ的な発想ですね。それは絶対やった方がいいですね。インターネットの領域ならば、私にもお役に立てることがあるかもしれません。もちろんボランティアでやりますから。

小山 おおっ、御大将自らかい、そりゃ大いに助かるよ。今からちょっとずつ動いて機が熟したら、中野ZEROみたいなでかいホールで全国各地からの代表チームが一堂に会するフェスティバルを開催する構想。パセオの10月号では云い出しっぺの白井盛雄さんに4頁の記事を書いてもらうことも決まっている。

西田 そういう未来ビジョンが明確に伝わっていると、全国各地からやる気の賛同者が集まりやすいですね。

小山 全国大会の優勝チームには賞金百万円とか、そこらへんは設営側が頑張れば何とかかなりそうだし。

西田 いいですね。でもたぶん賞金は

重要ではないと思うんです。

小山 賞金ではない？ じゃあ何？

西田 名誉だと思うんです。これだけ優秀なアーティストが出そろって来たのに、今は彼らを顕彰する機会があまりに少な過ぎるんじゃないかって感じるんです。

小山 なるほど、賞が足りてない。

西田 ええ、パイを広げるには、表彰して讃える機会を絶対増やすべきです。やる気の起爆剤になりますから、きっとフラメンコの人口増や質的向上につながりますよね。頑張っておられる方々のプロフィールを、それにふさわしい内容にもっともっと充実させてあげたいです。

このあともフラメンコ界の未来戦略について、ぶっちゃけ意見交換はさらにヒートアップするのだが、残念ながら誌面は尽きる。西田氏の構想は「フラメンコの普及発展」に照準を定め、先行き不透明な近未来を直視する数々の具体的な方法論に及ぶ。

まだまだ鎖国の続くフラメンコ界にとって開国の手立てとは何か？ 限られたパイを奪い合うのではなく、パイそのものを大きくするためには？ またAI時代に対応するフラメンコのプラットフォーム構想とは？……とどまることを知らない彼の構想が、私の中ではあまりに漠然としていたフラメンコの未来にひと筋の光明を与える。

今日の話とその続きを、いつもの明快な論理でパセオに発表してくれないかと頼むと、ちゅうちょなく彼は快諾してくれた。この秋、それは実現する。
(つづく)

